
天狗の妻問い

方位磁針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天狗の妻問い

【Nコード】

N8985W

【作者名】

方位磁針

【あらすじ】

山女であるヤコは、いつも通り山神としての務めをこなしていた。そんな時に、ヤコの前に美しい天狗が現れた。その天狗が言うには、以前ヤコに助けられた、という。お礼に来ただけかと思いきや、いきなり「子どもを産んでほしい」と言われ・・・！？山女と天狗の怒涛の攻防戦が始まった。 和風ファンタジー。不定期連載です。

一日目（前書き）

懲りずに、新連載です。

一日目

「ええと、あなた誰・・・？」

いきなりだが、私は今窮地に立たされている。というのも、目の前にはアヤカシの中でも特に力を持つ天狗の男が、ニコニコと笑っているのだ。嫌な予感がバシバシ感じる。

難癖でもつけられたら、私は太刀打ちできないだろう。

「久しぶり、ヤコ。・・・俺、ヤコのために強くなるため、頑張ったんだ。ずっとずっと、会いたかった！！」

そう言つて、感無量とばかりに天狗は腕を大きく広げ、無邪気な笑顔で私に抱きつこうとしてきた。

「ギャー！何するんですか！？」

「・・・ヤコ？」

思わず、抱きつこうとする天狗を手で押して拒否すると、天狗はシヨックを受けた顔をした。

「いやいやいやいや。抱きつこうとするのがおかしいから。なんで、悲しそうな顔をするのっ！やめろ、その仔犬のようなウルウル視線は！ほだされたりしないんだからね？！」

「だから、あなた誰ですか！？」

「忘れたの？俺のこと」

さらに悲しそうな顔をする天狗の男に、なんだかこっちが酷いこと

をした気分になる。理不尽だ！

「え、えーと、私たち会った事があるんですか？」

相手は巨大な妖気を持つ天狗だ。私は、丁寧な言葉使いで話すことにした。

「うん小さい時に」

天狗はコクンとうなずいた。見た目は青年なのに、動作はなんだか子どものようなのだ。

すぐに天狗は頬を染めると、語りだした。

「俺らはあの時、運命の出会いをしたんだよ。あの時も可愛かったなー、ヤコ。今もスゲー可愛いけど。もうずっと忘れられないよ、あの時の思い出は」

天狗は恍惚とした表情になった。濡れたような艶やかな黒髪と瞳にスツと通った顔立ちは、絶世の美男子と言ってもいいくらいだ。今は、その表情が、うつとりとっていて、壮絶な色気を醸し出している。私は、今になって目の前の天狗の男が、すばらしく容姿が整っていることに気付いた。

「ヤコ、かわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいい」

・・・うん、残念なことに、変態のようだが。天は二物を与えない、というは本当らしい。

思わずドン引きし、うしろにズサササッと下がると、天狗は我に帰った。

「あ、ごめん！・・・とりあえず、俺達は小さい時にあったことがあるんだ」

天狗は、長い足で距離を詰めてきた。すぐに私と天狗の距離は縮まった。というかさつきより、思いのほか近い気がする。

「ち、小さい時ですか？」

「俺がこの山の中で迷った時、ヤコが俺を助けてくれた」

「この山で迷った・・・？」

思い出そうと、眉間をグリグリと押した。

私は、小さい時の記憶を一生懸命、引き出そうとした。そういえば、随分前に、私がまだ母と一緒に暮らしていた頃、この山で迷っていた少年を助けたことがあった。

彼は私を同じくらいの年頃で、ボロボロの衣服を纏い、ガリガリに痩せた子だった。

私としては、自分がいるこの山で死者が出るのなんて目覚めが悪い、という軽い自分本位の気持ちで助けてやったのだが・・・。

「・・・あ」

「思い出した！？」

天狗は思わず声をあげた私を、期待のこもった目で見てきた。

「あ、あの時の、ボロボロの服をしていた少年・・・？」

おぼろげだが、助けた小汚い格好をした少年を思い出す。みすばらしく痩せほそったあの少年が、こんなにも美しい天狗になるとは。

「そう！良かった。ヤコも覚えてくれていた！！」

直視するのも大変なくらい、美しい天狗は、キラキラと顔を輝かせて、喜んでいる。

「ははは、ソウデスネ」

今まで、全然思いつくことなんて、なかったけどな！

「とりあえず、ご無事それで何よりです」

「あの時は、ありがとう。・・・ヤコが生きる気力の無い俺に力を与えてくれたんだ。今の俺がいるのは、ヤコのおかげ」

「そんな、大層なことはいしていません。わざわざお礼に来てくれたんですか？かえって、すみませんでした」

「お礼・・・。うん、それもあるんだけど、もう一つしたいことがあって」

そう言って、天狗は目を伏せた。長いまつげが、影をつくる。少し言いよどんでいたが、決心がついたように顔を上げ、デレデレした顔からきりつとした表情になった。本来はこの顔なのだろうか。精悍さが加わり、不覚にも一瞬見とれてしまった。しかし、この天狗は爆弾発言をしてきやがった。

「ヤコ、俺の子を生んでくれ！！」

この日から、私と天狗の激しい攻防戦が始まった。

一日目（後書き）

勢いで書いてますので、細かいところには多少目をつぶって頂けると、嬉しいです。

三回目

「ヤコ！好きだ！！俺と結婚してくれ！」

「しません！！」

ヤコを抱きしめてくる天狗―シノノメ―を私は必死に暴れて、腕の拘束から逃げようとした。

「ヤコ~~~~~~~~！！！！」

「離せーーーー！！！！！！！！」

何故、こうなったかというと、話は初日に遡る。

「む、無理です！出来ません！！」

私は、いきなり自分の子を産めだのと言ってきた天狗に向かって叫んだ。

「分かってる。お互いをよく知ってから、ってことでしょ？」

「ちがうわっ！！」

「んじゃ、お友達からってこと？俺気長に待てるよ！」

「それも、ちがう！ってか、なにそのポジティブ思考！？私は結婚そのものが嫌だって言っているの！！」

何を言い出すかと思えば、この男、いやこの天狗、とんでもないことを言い出すものだ。いくら、幼いころに会っていたとしても、いきなり結婚する、という思考回路が分からない。

思わず、アヤカシの中でも妖気が強く自分が全然適わない天狗に、敬語をつけるのを忘れる。

そうすると、天狗はいきなり無表情になった。瞳にはドロドロとした気配が写る。

「・・・もしかして、ヤコには好きな男がいるの？だから、俺とは契ってくれないの？」

先ほどから、笑顔だったり嬉しそうな顔をしていただけに、その変わりように寒気がする。

「ち、ちがいます！！」

「じゃあ、なんで？」

「だって、あり得ないでしょ？幼い時にあっただけで、こ、子を産めだなんて・・・」

最後は言うのも恥ずかしくなって、ゴニョゴニョとなってしまうた。

「そうなのかな・・・。でも、俺にはヤコとの出会いが俺の人生を変えてくれたんだ。生きる希望が与えられた・・・」

そう言っ、幸せそうに、でも少し寂しそうに天狗は呟いた。

私にとっては気まぐれに近い気持ちで助けたのだが、この天狗にとつてはそれほどのものであったのか……。私は少し考えた。

「うん。ヤコにはいきなりだったから、驚かせたかもね」

天狗は先ほどの、少し恐ろしい雰囲気から、また初めの調子を取り戻した。

うん、そうなんだよ。よく分かってくれた。普通、いきなり結婚とありえないからね？

この話はなかったことに……。

「だから、今日から妻問いの儀式をすることにする！」

「そうそう。やっと分かって……。って、えええええー！！！！！！」

妻問いの儀式ですって！？

これは、昔からある奥ゆかしい儀式の一つだ。自分の妻にと願う男が、その意中の相手のところに毎日通い、その魂に少しずつ印を残していくもの。千日それが続いたら、その印は完成し、めでたく男は相手を妻にできる、という呪であり、契約のようなものだ。まあ、男が女のところに毎日通うことで、その気持ちが本物であることを示すことが真の目的なのだろうが、印が完成してしまうと、相手の女はその契約を断れず、男と結ばれるしかない、という何ともはた迷惑な儀式でもある。

そんな恐ろしい、ものをこの男はあ~~~~！

「断固拒否！強制です！！セクハラ！！」

「でも、俺の気持ちをヤコに示したいから」

天狗は、聞き分けの悪い子どもをなだめるような、顔をした。

ちよ、何勘違いしているのさ！まるで、私が悪いような感じになっているんですけど。

ムカツク！嫌だって、言ってるじゃん！！

「いや、だから・・・」

私の抗議も空しく、天狗はさっさと私の額にコツンと人差し指を突き、呪を唱えていた。

「我、シノメは契約しよう。山女であるヤコを妻とするため、千の夜を通い続けんことを」

——ポウ——

体のなかに熱いものがかけめぐり、何かが魂に刻み込まれた気がした。

「っ！！」

やりやがった。この天狗、最悪だ。話も聞かずに、儀式を始めてしまった。

そんな混乱した意識の中、目の前にいる天狗は艶やかに笑った。

「あらためて、俺はシノノメです。ヤコの夫になる男だよ」

そんなこんなで、初めに話しは戻る。

儀式をした後、天狗―シノノメ―は私のもとに通うようになった。私に熱烈な求婚をしながら。

三目（後書き）

和風なのに、何で外来語が出てくるの？というツッコミは無しで、
お願いします。

三十日目

山神とは、その存在もながら、役割も地味な存在だと思う。自分の管轄する山を監視し、その山から滅多に出ることは無い。そんな存在に生まれたのが、ヤコだ。

山女である母と、隣の山男である父が結ばれ、ヤコが生まれた。ヤコの下には弟がいて、幼い頃はヤコは母の山で、弟は父の山で育った。今では、ヤコと弟は両親の山を継ぎ、守っている。ちなみに、両親は今でも新婚のようにラブラブで、『新婚旅行よ』と言って、全国津ヶ浦ヶをまわっている。つまり、ヤコと弟は両親の代わりに山の管理を強制的に継がされたようなものだったりする。

「よし！河川問題なし！木々も問題なし！生き物も問題なし！よし、今日のチェック終了」

私は、今日も山女としての勤めを果すべく、入念に山の監視を行っていた。柔らかな春の風が、私をなでとても気持ちいい。目を細め、眩しい空を見上げる。

「ふふ、いい天気！今日はいいことありそう」

「精が出るね。今日はあと何するの？」

「ありがとう。今日の務めは終わったから、あとはお菓子とか食べながら、まったりしようと思うの！」

「へー、どんなお菓子？」

「お菓子なんて、山から出れない私だから、滅多にありつけないんだけどね、昨日山の麓のトミ婆がお供えにもってきたくれたものが・・・」

ん？私誰と話してるの？なんか、この声最近毎日聞いているような・・・。

さっきののかな気持ちから、一転して恐怖心が広がる。後ろから声が聞こえていたが、後ろを見たくない。

「よかったね。大福とか？」

さっきの声は、今は真後ろに感じられる。息がフツと耳にかかる。一気に寒気がした。

振り向きたくない。ないが、振り向かなければならない。

ヤコは油の足りないブリキの人形のように、ギギギツと後ろを振り返る。

振り返ると、思ったより間近にシノノメの顔があった。

「ん、どうしたの？」

すばらしく整った顔を切なげにそめ、目の淵が少し赤くなっている。なんだか掠れた声でヤコに問う様は、どんな凄腕の遊女もはだしで逃げだすほどである。

「ひぎゃー！ー、出たー！ー！」

ヤコは逃げようと駆け出した。

走るのよ、ヤコ。まるで、風のように！！

そう自分に言い聞かせながら、走ったヤコだが、すぐにシノノメに

捕まってしまった。いつもながら、つぶされるのではないか、という勢いで抱きしめられる。

「ちょ、ちよっと、離しなさい！嫌って言っているでしょ？」

「ヤコ、お菓子が好きなの？だったら、俺が毎日持ってくるのにー！お菓子であんなに嬉しそうになるなんて」

「え、本当！？って、イヤイヤイヤ。私がそんなんで、釣られるわけ無いでしょ！？ってか、聞いている？はーなーせー！」

「あんなに、頬を染めて語るヤコ、すごい可愛かった。ヤコヤコー！！」

「話を聞けーーーー！！」

「ふふふふふふ」

シノノメは気持ち悪い笑いをして、小さく呪文を唱えた。

ポウッ

身体に熱い痺れが行き渡る。

ああ、今日も印を刻まれてしまった・・・。

毎日、こうやってシノノメは印を刻みにヤコのところに来る。ヤコがどんなに暴れても、拒否しても、妖気が桁外れにある天狗のシノノメにとっては、赤子を扱っているようで、たやすく拘束され魂に呪を刻むのだ。

「また、負けた」とガクツとヤコが落ち込んでいると、シノノメは満足げにヤコを抱きしめながら眺めた。

「段々と、印が大きくなるね。・・・ふふ、まるで俺に染められていくみたい」

ゾワ！鳥肌が一気にたつ。ギャー！気持ち悪いこと言うなー！ってか、手をさりげなく握るなあ！
こうなったら・・・。

バチンッ！

ヤコは堪らず、ぎゅぎゅうと抱きしめてくる、シノノメの頬を叩いた。

一瞬腕の拘束力が緩んだのを見逃さず、ヤコはシノノメの腕から逃げた。

「いいかげんにして！」

フフン、妖気の弱い山女でも、攻撃はできるんだからな！叩かれた頬に手を置き、呆然とするシノノメ。

少しは、ダメージ受けたのか？やるじゃん、私！出来る子、私！天狗に勝てる存在なんて、そうそういない。実は私強かったりして？

注意深く、シノノメを見てみると、奴は

「ヤコ、痛いよ」

と言って、ポツと頬を染めた。

なんでだーーーーー!!!

やっぱり、変態なのか!?

どことなく、嬉しそうに叩かれた頬をなでるシノノメ。

これが、最近アヤカシたちの噂にきく『えむ』って奴なの!?

このあと、まったりとするはずのヤコの予定が大幅に狂わされるのは、言うまでも無い。

三十日目（後書き）

ヤコは山神という設定です。山女とか山男というのは山神の性の判別の名称です。

これは、方位が勝手につくっていきますので、あしからず。

八十五日目

「はああああ、疲れるうー」

ヤコは自分の一軒大きな神社のような住家で、ため息をついた。原因はいわずもがな、あのにつくき天狗である。奴は毎日飽きることなく、あいもかわらず通っている。心なしか、スキンシップも激しくなってきたいる気がする。

季節は初夏に差し掛かり、草や木の葉が青々と茂っている。

ヤコは縁側で、そんな景色を眺めつつ、ぼんやりとしていた。

「なんだ、ヤコ。疲れたのかあ？」

そう言つて、小さい体でよっこらしよ、と縁側に上り、ちょこんとヤコの隣りに座るのは、ムクだ。

「だらしないなあ。山神なんだから、もう少し威厳を漂わせれば、いいものをう」

そう言つて、ヤコの膝の上に座つて、見上げてくるのは、ロク。

ムクとロクは、この山に住む低級の双子のこだまのアヤカシだ。山に住む低級のアヤカシは、その山の山神に守ってもらう存在で、本来ならばもっと山神を敬うものだ。

しかし、ヤコは成り立ての山神であるし、小さき時からヤコを見守っているアヤカシ達にとっては、主というより少し情けない娘か妹のように感じているらしい。

「失礼ね。しょうがないでしょ？あいつが毎日来て、印を刻んでくるのよ？どうにかして、この状況を打破しないと、あいつの思う通

り嫁にされてしまう・・・！」

「ヤコが嫁にいくのかぁー？なら、ミオ様達が戻って来るなぁ。いやはや、それは良いかもしれぬ」

ムクが悠長に笑うと、ロクも手を「そうだそうだ」と叩いて笑う。

ミオはヤコの母であり、ここの先代の山神である。ミオへはこのアヤカシ達も尊敬している。まったく、失礼な奴らだ。

「笑う場合じゃなあってーい！大体あんたら、山神である私が襲われているのに、なんで助けないのよ？！気配も全然みせないし」

この山に住むアヤカシは決して、少ない。しかし、無情にもシノノメが来ている間は、なりを潜めているのだ。

「だってなあ、天狗だぞ？我らが敵うわけないだろうが」

ロクが首を振りながら、答えると、ムクも「無理無理」と言う。

「だからって、全然助けないのは酷いじゃない！・・・そうよ、あんな達が居留守を使えばいいんだわ！」

ヤコの中に名案が浮かんだ。そうだ、アヤカシ達に居留守を使ってもらってヤコは隠れていれば、いい。この山のことなら何でも知っているヤコだから、いい隠れ場も知っている。妻問いの儀式は、一日でも男が通えず、印を刻めなければ、効果は消えてしまう。今日失敗すれば、もしやまた初めから印を刻むのが、面倒になってシノノメも諦めてくれるかもしれない！

「いける、いけるわ！！よし、急いでで山のアヤカシ達を集めて？緊急会議よ？」

自分の名案に酔いしれながら、「いやだあ」と言うムクとロクを無視しつつ、叫んだ。

「ふ、ここならバレないわ！」

満足げにヤコは、自分の周囲を見渡した。ここは洞窟で、入り口は分かりにくいところにある為、この山に住むアヤカシ達でさえ、知らないものも居るくらいだ。

あのと、嫌がる低級のアヤカシ達にお願い（供え物を分けてあげない、という脅しもしつつ）して、なんとか作戦にありついた。水と食料も万端に用意している。完璧だ。あとは、一日が過ぎるのを待つだけ。

「さてと、大福でも食べつつ気長に待ちますか？」

気分は、軽いピクニック気分である。

「おいしそうだね」

「・・・ハハハハハハ」

何で居る！！ヤコはいつの間にか目の前で笑うシノノメに恐怖した。泣きそうになった、ってか、泣いた。

「あのー、どうしてここが分かったのかな、なんて・・・？」

アヤカシ達にすら、この居場所は伝えていなかったはずだ。

ヤコは恐る恐る聞いた。

「ん？匂い？」

美しい顔を輝かせて笑う天狗に、戦ヶ恐怖する。なんだか、とても怖いことを言った気がする。今のことは聞かなかったことにしよう、うんそうしよう！

「あ、この山のアヤカシ達から、手紙を預かってるよ？」

「へ？」

せめて、こいつを引き止めることは出来なかったのか、と嘆きながら渡された手紙を見ると、こう書いてあった。

『ごめん、無理。』

アヤカシ一同

「うわああああん！！」

手紙を思わず、破いた。

この作戦もダメなのか、とヤコは意識と飛ばした。その間にシノノメに印をこっそりまた刻まれているとも知らずに……。

一二〇日目

「うん、揃っている」

シノノメは、再度自分の持ってきた荷物を確認した。愛しいヤコと
もっと仲良くなる為に、必要なものだ。

「ふふ、楽しみー」

思わず、にやける顔を戻そうとする（・・・が、隠しきれていない）
。

さあ、かわいい愛しいあの子のもとへ早く、行こう。

「なんじゃ、ヤコ。今日も色気がないなあ」

そう言つて、はあ、とわざとらしくため息をつくのは、小豆とぎの
次郎である。

「キーーーー！うるさい！いきなり、何なのよう！」

この失礼なアヤカシは、私と会うなり、この暴言を言ってきたのだ。
この山のアヤカシ達は本当に、山神である私に尊敬の念がたりない
んだからっ！

「何でも、最近天狗が来とるではないか。しかも、ヤコを嫁に、と
望んでるときてる。いやー、しかし、ヤコのどこが良かったんじゃ
か」

「うるさいうるさいうるさい。この偏屈じい！」

「サル娘」

「ウキイーーー！」

ヤコを敬わないアヤカシとヤコの喧嘩は日常茶飯事となっている。次郎は特に、ヤコをからかつては、楽しんでいる愉快犯だ。だが、何かあったときは、長年生きてきたことで培った知識を活かして、頼りになる存在でもある。酒に弱いのが、たまに傷だが。

「おい、ヤコー。また、天狗の男がきたぞ」

「きたぞきたぞー」

とてととと、ムクとロクが小さい体で近寄ってきた。

「ゲッ！また来たの！？ムク・ロク・次郎、今日も居留守を――」

「「「ヤダ」」」

3体のアヤカシは声をそろえて、こりずに居留守を使おうとするヤコの声をさえぎった。

「うう、ひどい。仮にも、この山の主が困ってんのよ？助けてよ」

「そんなこと言ってもなー？我らには無理だ」

「なー？」

ムクとロクが仲良く声を揃える。

「そんなこと言わずに・・・！よろしくねっ！！」

「あ！まてっ！、逃げるなヤコー！」

ダッシュして逃げ出したヤコの背中を、次郎たちは見るしかできなかった。

「あれ、今日は見つけてこないな」

今日も私しか知らない穴場で、隠れていた。どんなところに隠れても、シノノメは見つけてしまう。今のところ0勝36敗という成績だ。しかし、シノノメが山に来たという知らせを聞いて、大分経ったが彼は来ない。もしかして、帰った！？やったー！んじゃ、印の効果もなくなるじゃん！

すっかり、日も暮れてしまった。とりあえず、皆のところに帰ろう、と私は元いた場所に戻る事にした。

「あー、ヤコ！やっと戻ってきた」

シノノメは笑顔で、家である神社に帰ってきた私を出迎えた。・・・やっぱり、いたか。がっくり。

奴は、私の手をいつのまにかつかみ、縁側に座らせた。

「そろそろ、迎えに行こうかな、って思っていたんだけど、ヤコから帰ってきてくれたから良かったよ」

「ははは・・・さいですか」
もはや、私の隠れていた時間を返してくれ。

「前々から、ヤコってかくれんぼが好きだったんだってね？小さい頃は、迷って山のアヤカシ総出で搜索されたことがあった位なんだから、よっぽどだねー」

「へ？」

何でそれを知っている！？
驚く私に構わず、シノノメは話続ける。

「好きなお菓子は、饅頭。特にこしあんの。そして、苦手な食べ物は、ピーマン。食べるのが大好きで、何度もお腹壊したんだってー？ダメだよ、ほどほどにね？」

「なっ」

「お風呂に入るのも好きなんだよねー。将来の夢は、秘湯めぐりと美味しい物食べ歩きなんでしょ？本当に、好きだよね！そういえば、お尻にほくらが2つあ——」

「ギャーーーーー！！！！何でそんなこと知っている！？」

「僕、ヤコのことなら、よく知っているよ」
ニコニコと笑うシノノメ。何だか、寒気がする。

ふと、シノノメの後ろを見ると、山のアヤカシたちがざわざわと騒いでいた。なんだか、嬉しそうに。
よく見ると、次郎が酒をうまそうに飲んでいた。ムクとロクも金平

糖を一杯に手に持ち、喜んでいる。他のアヤカシたちもおのおの好きなものを持って、幸せそうにしている。

「・・・お前らかつ！お前らが話したのかーーーーー!?」

私の悲しい叫び声が響いた。・・・が、アヤカシたちの楽しそうな声にすぐにかき消される。それでも、負けじと怒っていたら、シノノメに呪を施されていた。

二〇四目

私は、秋という季節に、色を変える木々をぼんやりと見た。毎年見る光景だが、何度見ても飽きない。季節によって表情を変える、自然の様子が、本当に好きだ。

「ヤコー！何しているの？」

今年は特に、紅葉が綺麗だ。こんなに綺麗なのは、お母さんと一緒に見た時以来かもしれない。

「ねー！！ヤコー？ヤコヤコヤコヤコヤコ」

ふふ、こつやつて、じつくりと私の山を眺める時間も大切だね？

「・・・ヤコ、お饅頭食べる？」

「食べる」

私は、しょうがなく、シノノメを見た。シノノメはやつと目があったことで、ぱあっと笑顔になったが、その後少し怒った表情になった。

「もう、無視しないでよ、ヤコ」

寂しいじゃん、と口を尖らすシノノメだが、いい年した男がそんなことしても、気持ち悪いだけだ。

「いつも、私の休息を奪うからでしょ！？そろそろ、あんたの相手するの疲れてるのよ」

ふん、と鼻を鳴らし、シノノメを睨む。奴は、むうと頬を膨らまし

て、饅頭をだした。しょうがないから、饅頭だけは食べてやる。

「もぐもぐもみぐもぐん（さっさと帰りなさい）」

「何言っているか、分からないよ……。ヤコ」

そんな食いしん坊なところも、可愛いんだけどね、と頬を染めるシ
ノノメを置いて、私は歩き出す。もちろん、奴は、待つてゝと追いかける。

振り返り、いい加減にしろ！と怒鳴ろうとした時、誰かの叫び声が聞こえた。

「若く、若く、若く！どこですか？」

聞いたこと無い声だ。人間ではない。妖気がかすかに感じる。声のするほうに行こうとすると、シノノメが立ちふさがった。

「ヤコ。あんな声気にしないで、あっちに行こう？」

「私は山神なのよ？侵入者があれば、ちゃんと確認しないと！」

「んじゃ、俺が行くよ」

「無理に決まってるでしょ!？」

珍しくくさがるシノノメを怪訝に思いつつ、答える。

言い争っている、声の主が出てきた。

「若——！見つめましたぞ！！」

そう言うって、草の茂みから出てきたのは、カラスの姿をして、羽織

をまとったアヤカシだった。後ろでチツとシノノメが、舌を鳴らした。

「へ？」

「若！毎日毎日、お勤めを抜け出している、と思ったらこんな所に來ていたのですか！？早く、戻ってくださいよ」

カラスのようなアヤカシは、シノノメの正面までいき、文句を言った。シノノメは、ヤコに見せた事のない仏頂面をしている。

「さあさ、アズマと一緒に帰りましょう！」

「嫌だよ」

アヤカシは必死にシノノメの背中を押すが、シノノメは動かない。

「ちょ、ちょっと、そのアヤカシ、あんたの知り合い！？」

ついていけず、私がシノノメに聞くと、そのカラスのアヤカシが私を睨んだ。小さいから、あまり迫力はないが。

「おいっ！若を、あんたとは、なんと失礼な！貴様、山神か！？ふん、微弱な妖気だな！そのような山神が、若に何用だ！」

「なっ！」

いきなりの、罵倒に、言葉を無くす。そんなアヤカシを、シノノメはむんずとつかんだ。

「ぎょえっ」

苦しそうな声を出す。

「アズマ、ヤコになんてことを。ヤコは俺の大切な妻となるべき人だ。いくら、君でも彼女を悪く言うのは許さない」

「妻になるなんて、言っていないでしょー!？」

さりげなく、妻呼ばわりするシノノメにツッコむ。私の指摘に気付かないフリをするシノノメ。おのれえ。私はシノノメを睨んだ。・が奴は、嬉しそうに私を見つめてきた。なんだろう、この疲労感。

そんな私たちのやり取りを見ていたアヤカシ・アズマ・は、シノノメの手から這い出すと、まじまじと私を見た。

「これは、妻問いの呪!？まさか、若がこれを!？」

「そうだけど」

「んなー!思いとどまってください。若!あなたは、カラス天狗一門の頭領ですぞ!戻れば、若を慕う美しい同族の美姫がたくさんいるでしょうに!。山神との婚姻などとは・・・」

ムカ!なんとなく、アズマというらしいアヤカシの言い方に、いらつとした。

私がアズマとやらを睨んでいると、シノノメは静かに言い放った。

「確かに、俺はカラス天狗一門の頭領だ。だが、妻になるものは俺自身が決める。このヤコが俺の妻になる」

「だから、妻じゃないって・・・」

もはや、ツッコむのも疲れた。

三十二日目

カラスの姿をした妖怪、アズマ、というらしいが、あの日以来何かとこの山に来るようになった。どうやら、シノノメはアヤカシを二分する勢力の総大将らしい。そして、アズマはその付き人とのこと。しかし、シノノメに苦勞されている私としては、今更敬う事なんて出来るはずもなく、いつものようにシノノメに接していた。

アズマは、私にシノノメが求婚するのが気に入らないらしく、何かと私にケチをつけるようになった。理不尽すぎる。てか、私が好きでシノノメから付きまとわれているわけでないのに。

「ヤコー！おはよう」

にこやかに挨拶してくるシノノメ。だが、油断するなかれ。こいつは巷で噂の「すとーかー」にすぎない。の割に、毎日通ってきているせいで、シノノメが来るのが当たり前になっている今日この頃。はっ！私も気を引き締めないと。いつのまにか、こいつのペースにはまってはダメだ。

「帰れ！！」

邪険にシッシと手を振る。

「貴様——！！若になんてことを！失礼だぞ！」

しゃべるカラスがシノノメが何か言う前に、しゃしゃり出る。

また、出たよ……。私はげんなりとアズマを見た。

「勝手にあなた達がきているからでしょ。今日の仕事も残っているんだから、早く帰ってくださいよ」

「ふんっ！若がせっかく来ておるのだ。茶くらいださんか」

「だーからー、私は今忙しいのです!!」

「この小娘が！」

「あなただって、カラスでしょー!？」

「なに!?これは仮の姿じゃ!本来の姿はなあ――」

「はいはい、そこまで」

私とアズマの間に、シノノメが入ってきた。すこし、不機嫌そうだ。

「アズマばかりずるい。ヤコ、アズマより俺と話そうよ」

「へ？」

「わ、若？」

シノノメは眉をひそめ、アズマを睨んだ後、私をみた。

え、何?アズマと話していたのが気に入らないわけ?

ちゃんと現実見ようよ。ケンカしていたんですけど、私たち。

しかし、シノノメの発する妙な威圧感にそんなことを言えず。プイ

つと顔を背けることしかできなかった。

しばらく、シノノメの視線を感じる。無言の圧力がかかっている。しばらく、すると「はあ」というため息が聞こえた。

なんだよ、まるで私が悪いみたいじゃん。何となく、居心地悪い。

「んじゃ、私仕事にいくから」

私は、さっさとこの場から逃げようとした。

「ヤコ、休憩しない？お饅頭持ってきたんだけど」

「食べる」

1秒とおかずに答えた私を、アズマが呆れたように見てきた。しょ、しょうがないじゃん！お饅頭に罪はないんだっ。

私たちは、私の家に向った。お饅頭は私の家で、食べると強制的に（シノノメによって）決まった。

もはや、私の家に我がもので入るシノノメ。しかも、何がどこにあるかなど把握している気がする。さっさと、居間に行き、座布団をとり座ってしまった。あ、あれ、どうして？

釈然としないが、饅頭のため、3人分のお茶を淹れた。

お茶をお盆にのせた私を見て、シノノメが歓声をあげた。

「わー！ヤコが淹れてくれたお茶、嬉しいな！」

「そ、そう？」

目を輝かせて喜ぶシノノメに、悪い気はしない。でも、照れるのも

しゃくだから、そっけなく返事をした。

お茶を用意し、卓のうえに饅頭を置く。シノノメから離れて卓に座ると、いつのまにかシノノメ隣に座って笑いかけてくる。・・・気にはしてはダメよ、ヤコ。図太く生きるのよ。とりあえず、何でもないフリをした。

私たちは、いただきまーす、と声をそろえた。私は饅頭にかぶりつき、シノノメは頬を染めながら、お茶を味わうようにこくんと飲む。アズマは私たちの様子を伺った後、饅頭を一口食べ、お茶に口をつけた。

「ブフオオオっ!!」

「ちょっと、アズマ。せっかくヤコが淹れたお茶を噴出すなんて、失礼じゃないか」

「辛っ!! なんじゃ、これはあー!!?」

アズマはお茶を勢いよく、噴射した。シノノメはそんなアズマを注意する。

「あ、言い忘れましたけど、間違っでどれかのお茶にわさびを入れてしまったので、気を付けください」

「小娘——！お前かあっ!!」

怒鳴るアズマを気にすることなく、饅頭を食べ続けた。尚も怒ろう

とするアズマ。しつこいなあ。

「しょうがないね、間違ったんじゃ」

「ええ、間違いです」

「絶対、わざとだろうが！」

ねー？と（しょうがなく）シノノメと相槌をとる。アズマはぶんすか息を巻いていたが、はっとしたようにシノノメを見る。

「若っ！若のお茶は大丈夫でしたか！？」

「別に？とても美味しいよ」

意味深に私に流し目を送ってくるが、これは無視。

「そうでしたか・・・」

アズマは、ほっと胸をなでおろした。しかし、また私を睨む事は忘れていない。

「おい、お前、若にこのようなことしたことは、あるまいな？」

「ありますけど」

「なっ！」

シノノメを追い払う為、私は何でもした。その一つとして、お茶に激辛の唐辛子を入れてみたり、わざと焦がした料理を振舞ったことがあった。

・・・が、奴は「美味しい美味しい」と何でもないように平らげてしまうのだ。終いには、こっちが馬鹿らしくなり、この作戦は使っていない。

「・・・効かないから、止めた」

「は？」

ニコニコと隣で笑うシノノメをちらりと見て、私はむすつと答えた。アズマは呆気にとられたように、私たちを交互に見ていたが、しばらくすると黙り込んだ。

帰るころには、私に不思議な視線を投げかけて行った。

そして、私は今日も印を施された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8985w/>

天狗の妻問い

2011年11月8日12時36分発行